

〔翻訳〕

カール・フェルカーと英国における
ドイットゥルネンの始まりミヒャエル・クリューガー* 著
有賀 郁敏**訳

訳者解説

本稿はM.クリューガー教授が発表した論文「カール・フェルカーと英国におけるドイットゥルネンの始まり」の全訳である。同論文はクリューガー、A.ホフマン共編『移民の中の西南ドイットゥルナー』の中に収められている¹⁾。本書はバーデン・ヴュルテンベルクススポーツ史学会による「学術文献シリーズ」(代表:M.クリューガー)の第8巻として2004年にホフマン出版から刊行された。ちなみにクリューガー教授は本論文をベースとした学会発表を第1回スイス歴史学会大会(2007年3月、ベルン大学)で行っている(分科会テーマ:スポーツ史の展望)²⁾。クリューガー教授の経歴については詳細を省くが、氏は現在ミュンスター大学スポーツ科学インスティテュートに所属し、識者の齊しく認めるであろう、ドイツにおけるスポーツ史、スポーツ教育学、オリンピック・スタディなどの学問領域をリードする泰斗である。同時に氏はドイツの代表的な学術雑誌「スポーツ科学」(Sportwissenschaft)の発行者としてスポーツ科学全体の発展にも貢献している。

本書の主題はタイトルからも読み取れるように、国外へ移住したドイツ人トゥルナーのかの地での活動実態を解明することにある。これらドイツ人に移住を促した事由は時代に応じて様々であるが、同書の序文にも記されているように、移住の大波の一つが1848/49年革命後に押しよせたことは歴史が証明しており、少なくともトゥルナーもアメリカ合衆国などへの移住(あるいは亡命)を余儀なくされた³⁾。3月前期の西南ドイツはトゥルネン協会に加えて男声合唱協会や射撃協会等の協会運動の中心地であり、トゥルネン協会からはドイツ全体のトゥルネン運動をリードしていく人物も輩出されている。例えばドイツにおけるトゥルネン協会の統括組織、ドイットゥルナー連盟の初代会長に就任したT.ゲオルギーはヴュルテンベルクのエスリンゲン出身の弁護士であり、本書でも扱われているF.ヘッカーやG.シュトルーヴェはマンハイムなどのトゥルネン協会の政治路線に影響を与え、後に合衆国へ移住してトゥルネン協会を指導したバーデン出身の急進デモクラートであった。したがって、本書が移民との関係で西南ドイツのトゥルナーを取り上げることは、史実の面で確たる根

* ミュンスター大学スポーツ科学インスティテュート教授

** 立命館大学産業社会学部教授

拠があるといつてよい。本書は16の論文をトゥルナーの移住地別にヨーロッパ、アメリカ合衆国、南米そしてアジアの4領域に分けている。当然のことながら移住者数の面からアメリカ合衆国への移民を扱った章が最も多い（11論文）。ちなみに、西南ドイツトゥルナーの合衆国への移民研究は本書の刊行以降も進められており、先のバーデン・ヴェルテンベルクススポーツ史学会が企画したシンポジウム（2005年10月28、29日）、「アードルフ・クルスとトゥルネン運動——ハイルブロン・トゥルネン祭（1846年）からアメリカへの亡命」は注目すべき研究成果である⁴⁾。

さて、クリューガー論文で論じられているカール・フェルカーはドイツ史では言うまでもなく、トゥルネン史においてすら特に注目されてきた人物とは言い難い。クリューガー論文の文献一覧に掲載されている研究の多くも、フェルカーについては事典的解説の域を超えてはいない。とはいえ、19世紀初頭のトゥルネン運動の生成と展開について西南ドイツに焦点をあて解明しようとするなら、この人物を欠くことは許されないであろう。訳者は別稿でテュービンゲン市のアルヒーフ史料を活用して、フェルカーが1819年に起草した「テュービンゲンのトゥルナー組織の規則」の歴史的意義の一端について論じたが⁵⁾、そこで明らかになった内容と本論文で描かれている国外移住前のフェルカーの活動とは深く関係している。フェルカーは移住先からドイツに戻ってトゥルネン運動を再び指導することはなく、その時点でドイツのトゥルネン史研究がフェルカーの経歴を1820年代で閉ざしてしまっていることは根拠が無いわけではない。

しかし、クリューガー教授が論文を通じて明らかにしているように、フェルカーはスイスそして英国で苦勞を重ねながらトゥルネンの指導にあたり、トゥルネンの普及に向けた足跡を異国の歴史の中に刻んでいる。それゆえ、サンガレンの文書館に所蔵されていたフェルカーの回想録を手がかりに歴史の空白の克服を試みたクリューガー論文のトゥルネン史上の功績は大きい。もっとも、比較的多くの紙幅を割いて論じられている英国でのフェルカーの活動にしても、アメリカ合衆国へ移住してトゥルネン協会の設立や指導に携わったシュトルーヴェらの経歴と比較するなら、なにほどこかの成果があったようには見えにくい。この点は、ドイツにおいて未だトゥルネン協会が本格的に設立していない1820年から30年代の英国と爛熟期を経た1850年代以降の合衆国という時代ならびに社会状況の差異を考慮しなくてはならない。しかし、英国社会からみたトゥルネンに対するポジティブないしネガティブな評価、例えば階級社会とトゥルネンの平等思想との関係を通じて、むしろトゥルネンの歴史的 content が全体として豊富化してゆく点に訳者は注目したい。

ところで、社会思想史家の的場昭弘氏によれば、「本来イギリスは、ドイツ人が好んでやってきた国ではなく、イギリスのドイツ人コロニーが拡大するのは1850年代以降であり」「政治亡命者にしても1848年革命以前にあえてイギリスに流れるものはいなかった」という⁶⁾。フェルカーはなぜスイスを経緯してロンドンへ渡ったのだろうか。クリューガー教授はスイスにおける政治状況の悪化を指摘しているが、この問題は同時代の英国社会におけるトゥルネン及びスポーツそして他の身体文化の歴史評価と併せて、さらに深く探究される必要がある⁷⁾。また、フェルカーはなぜ1840年代以降のドイツにおけるトゥルネン協会の運動に関与しようとしなかったのか。カールスバートの決議によって投獄されたF. ヤーンが保釈後にトゥルネン運動に対してなにほどこかの影響力を行使し、フランクフルト国民議会の議員を務めたことは対照的である。クリューガー論文では、ドイツのトゥルネン協会や英国のスポーツクラブの中で育まれた組織への帰属意識が、フェルカーのトゥルネンシステムでは欠落していた点を強調している。前述した「テュービンゲンのトゥルナー組織の規則」の

中で、一般市民へのトゥルネンの普及も展望していたフェルカーの目には、1840年代以降のトゥルネン協会の隆盛とそこに内在するアソツィアツィオンの機能がどのように映っていたのか興味深い点である⁸⁾。この問いに答えるためには、市民権を獲得し生涯を過ごしたスイスでのフェルカーの活動を史料に基づいて解明する他はない。スイスのトゥルネン協会運動に関しては別途研究してみたい。

最後に本論文の翻訳を快諾して下さった M. クリュエーガー教授に謝意を表したい。第1回スイス歴史学会大会の際に翻訳の了解をとってから、すでに2年近くが過ぎ去ってしまった。この間、訳者は学部役職に忙殺され、アカデミックな研究に集中する時間をなかなか確保できずにいるが、ミュンスター大学で訳者と同種の役職に就いているクリューガー教授ならば、こうした事情を斟酌してくれるかもしれない。もっともクリューガー教授は著作や論文も数多く発表している。本翻訳が訳者の研究の励みに繋がればとも思う。

注

- 1) A. R. Hofmann / M. Krüger (Hrsg.), *Südwestdeutsche Turner in der Emigration*, Schorndorf 2004.
- 2) 1. Schweizerische Geschichtstage in der Stadt Bern, “Zeiten des Umbruchs”, von 15. bis 17. März 2007. ちなみに同学会にはクリューガー教授とともに訳者も参加した。
- 3) 本論文では紹介されていないが、トゥルネン史を1848/49年革命とトゥルナーのアメリカ合衆国への移住・亡命と関連づけて詳細に探究した初期の労作として H. ノイマンの著書を挙げておかななくてはならない。H. Neumann, *Die deutsche Turnbewegung in der Revolution 1848/49 und in der amerikanischen Emigration*, Schorndorf 1968.
- 4) L. Wieser/ P. Wanner (Hrsg.), *Adorf Cluss und die Turnbewegung. Vom Heilbronner Turnfest 1846 ins amerikanische Exil. Vorträge des gleichnamigen Symposiums am 28. und 29. Oktober 2005 in Heilbronn*, Heilbronn 2007.
- 5) 有賀郁敏「19世紀前半のチュービンゲンにおけるトゥルネンとトゥルナー組織の規則」『体育・スポーツ史研究への問いかけ』（清水重勇先生退官記念論集）2001年，61-69頁。
- 6) ローズマリー・アシュトン『ロンドンのドイツ人 ヴィクトリア期の英国におけるドイツ人亡命者たち』（的場昭弘監訳）御茶の水書房，2001年，399頁。
- 7) 榊原浩晃氏は第50回日本体育学会記念大会（1999年10月，東京大学）で「カール・フェルカーの体操論とその歴史的意義—— Professor Voelker's Gymnasium（1825）を手がかりに——」と題する発表を行っている。氏の研究は英国におけるフェルカーの活動を，一次史料を用いて解明しようとする点で今後の成果が期待される。
- 8) 西南ドイツの協会運動に見られるアソツィアツィオン機能に関しては，有賀郁敏「ドイツ初期協会運動の性格と役割——19世紀前半の西南ドイツを中心に——」山本徳郎他監修『多様な身体への目覚め——身体訓練の歴史に学ぶ——』アイオーエム，2006年，278-301頁。

カール・フェルカー——1796年1月5日、アイゼナハにおけるヴァルトブルクの城管理人の11人兄弟（姉妹）の長男として生を受け、1884年にスイスのトゲンブルク地方カッペルで死去——はトゥルネン史では、とりわけ彼がヴェルテンブルクにおいてヤーンのトゥルネンをテュービンゲン大学で広め、教授した人物として名が知られている。彼はヤーン門下のエデュアルト・デュレとハンス・フェルディナント・マスマン——2人はヤーンの委託を受けて、またヤーンの名前でイエナの大学でトゥルネンを普及しようと試みた——の信奉者でもあった。フェルカーはイエナで法律学を学び、またイエナ大学のブルシェンシャフトならびに1815年に同地で創設された全ドイツブルシェンシャフトのメンバーであり、さらに1817年開催のヴァルトブルク祭にも加わった。テュービンゲンでは1819年に最初のトゥルネン場をヤーンモデルにしたがって建設した。しかしながら、このトゥルネン場はひと夏だけしか存続しなかった。フェルカーはいわゆるカールスバートの決議の発令（1819年）とそれによって発動した「煽動家訴追」にしたがって、スイスへの亡命を余儀なくされたのである。この時以降、ドイツのトゥルネン・スポーツ史叙述は、ほとんどカール・フェルカーに関して興味を示さなくなってしまった¹⁾。

それゆえ、これまで1819年以後の彼の活動がいかなる経過をたどったのかについて闇の中にある。フェルカーは90歳近くまで生きたものの、移住後、長い生涯において故郷のドイツに戻ることは許されなかった。彼が1877年にテュービンゲン大学創設400周年を契機に学長の名誉来賓としてテュービンゲンに招待されると、彼はその高齢と健康状態ゆえに、もはや旅行す



図1 カール・フェルカー 自画デッサン（1819年頃）。下方の余白にヤーンのトゥルナーのスローガンである「民族性」という筆致がある。

出典：UA Tübingen

るような状態ではなかった。しかし彼はある書簡を書き、そのなかで彼の初期における、愛国的活動の場であるテュービンゲンとテュービンゲン大学への連帯の意思を表明したのである²⁾。

1819年と1877年の間の約60年は、フェルカーが亡命地である英国とスイスで過ごし、その後、それぞれが故郷となった時期である。すなわち、当初彼はスイスへ逃れ、それから1825年にロンドンへ渡る。そこで彼はヤーンとテュービンゲンのトゥルネン場のモデルにしたがってトゥルネン場を作った。また、最終的にフェルカーは1839年に再びスイスへ戻り、ヘールブルクにおいてペスタロッチのモデルにしたがって教育施設を開設し、そしてスイス市民として政治にも積極的に携わった。スイスでの彼の最後の居住地であったカッペルにおいて、彼は現在まで公にされていない、サンガレンのカントン文書館で、史料的にも歴史的にも評価されてい



図2 テュービンゲン・ブルシェンシャフトのメンバーの名字が書かれた挿絵。おそらくカール・フェルカーが描いた。

出典：UA Tübingen

ない回想録の作成に1879年から取りかかったのである。彼はズユータリン字体において、多くの修正、挿入を縁に記した約200ページの回想録を書いた。タイトルページの記入後、この「カール・フェルカー教授の回想録」は、1915年8月にサンガレンの市図書館にフェルカーの里子、F. ファニー・フェルカー氏によって寄贈された。

フェルカーは、何よりも自らのために、そして彼にこのような稿本を書くことを求めた友人と知人に向けて、最終的に今一度波乱万丈の人生に関する映画を録画させる意図をもって自己の回想録を作成した。フェルカーは他人に心中を打ち明けたい人間であり、また新聞、機関紙そして文献として刊行されている言語に通じた熟達した文筆家であったので、おそらく後年、彼の回想録が単行本で出版され購入されるであろうことを計算していたのであろう。しかし、ここでは何よりも非常に個人的で、また多くの歴史と出来事が詰め込まれているこの回想録が重要である。そこでは確かに国民的なトゥルネン史からみて、われわれに知られている彼の活動の中心が重要な役割を演じることになる。そ

れはしかし、彼の人生の全体像の中では背後に退いているものである。

1. カール・フェルカー——あるトウルナーの 運命

本巻のテーマを考慮し、私は2つの視点に問題を集中したい。

第1に、フェルカーのトゥルネン史における本質的な視点および体験である。それはトゥルネン・スポーツ史の文献では概略的にしか叙述しておらず、空白が指摘されてきたものだが、フェルカーの回想録の分析と評価を通じてよりよく埋め合わせすることができる。第2に、フェルカーが英国で過ごした15年間の生活である。そこにおいて彼はドイツのトゥルネンをヤーンに依拠しながら知らしめようと試みたのであった。この時代に関しては、少なくともドイツ語によるトゥルネン史研究では何も明らかにされていない。またこの時代にとってフェルカーの報告は全く新しい情報を含んでいるのである。

カール・フェルカーは、確かにスイスへ行き、またそこで本質的な教育学的、トゥルネンの刺激を受けたドイツのトゥルナー、トゥルネンの文献学者、そしてトゥルネンの教授法学者、すなわちアードルフ・シュピース、オットー・ハインリヒ・イエーガー、アルフレート・マウルなどの系列に組み入れられる³⁾。フェルカーはしかし、これらの人物たちとは異なり、決してドイツへは戻らなかった。また、彼はドイツにおけるトゥルネンの広範な社会的、文化的そして教育・教授学的な発展への影響力を持ち続けなかった。他方でフェルカーは、アメリカへ渡り、そこでドイツのトゥルネンをヤーン

にしたがって普及させようとしたヤーンの著名なトゥルネンの弟子たちとともに論じられる。すなわち、カール・ベック、カール・フォレンそしてフランツ・リーバーらである。彼らはフェルカーのように、後に英国を経由してアメリカへ渡る前に、最初、スイスに拠点を設けた⁴⁾。初期の成果を残したものの、彼らの努力は水泡に帰した。たとえ彼ら3人すべてがアメリカの大学で名だたる教授に就任したとしても、である。同様なことはフェルカーについても該当する。すなわち、青少年時代に愛情と情熱を抱いたヤーンのトゥルネンは、彼が普及を試みようとした英国ではドイツほど大きな共感を得られることはなかった。しかしそのことは、彼の回想によれば、彼自身、特段に悲しむようなことではなかったようである。フェルカーは職業的な充実感の対象を専門としてのトゥルネン教師ではなく、ペスタロッチの模範にしたがって全体的かつ教育的に活動する教育学者に置いていたのである⁵⁾。

2. イエナとテュービンゲンにおけるフェルカー

話を最初に戻そう。カール・フェルカーはエデュアルト・デュレとハンス・フェルディナント・マスマンによるトゥルネンの「細菌」に感染した。かれらはヤーンを通じてトゥルネンとブルシェンシャフトの運動を促進させるためにイエナへ派遣されたのである。またその際、ヤーンと彼の友人として、後の暗殺者そして「テロリスト」と見なされたカール・ザントならびに急進的なギーセンの学生、カール・フォレン——彼は後にアメリカにおいて出世した——とともに、1815年にイエナで全ドイツブルシェンシャフトを設立したのである⁶⁾。フェルカーは

カール・ザントの「親しい」「親密な」友人として見なされた。ザントは詩人で恐らくロシア人であるスピオン・アウグスト・フォン・コツェブーを暗殺したが、この行動は1819年の「カールスバートの決議」を根拠に、ドイツ連邦におけるトゥルネンとブルシェンシャフトを禁止し、またドイツにおける「煽動家」を追放する口実を与えた。ザントはそれゆえ、マンハイムの処刑台に送られ、フェルカーはテュービンゲンを去り、スイスへ移住しなくてはならなかった⁷⁾。

イエナはドイツにおけるほとんどすべての大都市において、ブルシェンシャフトがそれまで一般的に馴染んでいた同郷人会的なコルポラツィオンに対するオールタナティブとして作られたモデルであった。「全ドイツブルシェンシャフトの思想は本来トゥルネンの父、ヤーンに由来していた」とフェルカーは記しているが、いずれにせよナポレオンに対する国民的な熱狂や高揚とならんで、学生たちにとって大学での同郷人的コルポラツィオンの伝統的で好戦的な儀礼に対するオールタナティブを創造する動機も存在した。

イエナのブルシェンシャフトとドイツの学生全体に対する中央の事件は、ヴァルトブルク祭であった。その際、若い法学生であったカール・フェルカーもまた重要な役割を演じている。彼はアイゼナハ出身であった。フェルカーは彼の文書のなかで、ドイツ全国から集まった学生たちの集会に関する正確な叙述を残している。ヴァルトブルクのリッターザールにおいて愛国的な演説を行い、いかなる決議を行ったのか、あるいは中央広場で集まり、1817年10月18日の夕刻にすべての集団が長い行列でヴァルトブルクへ行進する前に、そこでマスマンとデュ

レがトゥルネン運動を行った、といったように。そこでは炎が燃え上がり、フェルカーは、いかなる物体と本が最初に堆肥フォークで積み上げられ、その後で炎に投げ込まれたのかを詳細に論じている。「クールヘッセンの兵士の辮髪」と「将校コルセット」とならんで、ブルシェンシャフト学生たちから反動的と見なされた作家の文献、たとえばハーラーの『国家学の再興』、コッツェブの『ドイツ帝国史』、ならびにカンプツ、イマーマン、ザウル・B・アシャーあるいは「トゥルネンの仇敵」ヴァドウツェクの書も燃え盛る炎の中に投げ込まれた。

ヴァルトブルク祭にはテュービンゲン大学の学生も参加した。彼らは1年後の1818年10月18日、すなわちライプツィヒの諸国民戦争5周年にテュービンゲンブルシェンシャフトを設立した。また彼らはベルリンとイエナにおける同志たちがそうしたように、彼らの国民的な努力に公共の表現を付与するために、テュービンゲンにおいてもトゥルネン場を設けることを決議した。テュービンゲンの学生の一人、神学部生で「創設者」（プロテスタント神学セミナー、「修道院」のメンバー）であったフリードリッヒ・ヴィルヘルム・クルンプ（1790-1868）は、ハーゼンハイデにおいてヤーンと旧知の仲であった。彼はすでに1816年にヴェルテンベルクの最初のトゥルネン協会を、彼の故郷のゲマインデであるシュバルツヴァルトのヒルザウで設立し、また後にヴェルテンベルクにおける学校体育と少女体育の最も重要な推進者となった。すなわち、フリードリッヒ・ヴィルヘルム・クルンプは、彼が命名されたようにシュヴァーベンの「トゥルネンの教師」であった。彼はまた良質なトゥルネン教師を求めているテュービンゲンのブルシェンシャフトを召集し、彼らにイエ

ナへ行き、フェルカーにそれを依頼することを薦めた。フェルカーはテュービンゲンが求めている人物であった。なぜならば、彼はヤーンの生粋の弟子であり、トゥルネン、学生生活そして愛国的な精神を調和させることができ、そしてそれをすでにイエナにおいて実践していた人物だったからである。

フェルカーは自らの意志に基づいてテュービンゲンの学友の申し出を速やかに受諾した。その理由はすでにこの時点において「ブルシェンシャフト会員たちに対する状況が、ますます威嚇的になってきたからであった」。イエナの彼の多くの友人たちはすでに逮捕され、それゆえ彼が成長した町を離れるきっかけを見つけることはフェルカーにとっても全く好都合であった。テュービンゲンでフェルカーは最初から多くの活動をこなした。彼は1819年の春、当地のトゥルネン場の落成も手がけ、ハーゼンハイデより幾分狭いものの、それと同様のトゥルネン場を建設した。ベルリンのように、彼は大規模な遊戯場、走路、跳躍器具、登攀用支柱、平行棒そして鉄棒、木馬、投擲（槍投げ）用の施設、そして中心に「ティー」——トゥルナーが集会する場所——を設けた。テュービンゲンにおけるトゥルネン場の独自性は、フェルカーが去った以降も長く存在したトゥルネン小屋である。フェルカーはテュービンゲンにおいて非常に尊敬され、また愛された。テュービンゲンにおけるすべての生徒と学生たちは、1819年の夏、トゥルネン場、“ウンタラー・ヴェールト”でテュービンゲンの教養的、アカデミー的、市民公共の活発な関与のもとにトゥルネンを行った。加えて、ヴェルテンベルク王国大臣の子弟も定期的に、熱心に彼の父の同意のもとにトゥルネンに参加したのである。

3. スイスで

しかし、恵まれた状況は長く続かなかった。トゥルネンの自由はテュービンゲンにおいて一夏しか続かなかった。フェルカーは1880年頃に書きとめた彼の回想録のなかで、次のように記している。1819年3月末、彼の親友であるザントによるコツェブーの暗殺は、「あらゆる進歩的な心情を急激に引き起こし、また今日、古いドイツの皇帝の暗殺をすべての進歩的、とりわけ社会的な努力の弾圧の口実として反動側が利用しているように、当時もブルシェンシャフト、トゥルナー、大学の教師そして自由主義的出版物の活動に対する反動内閣の介入がなされた。」

今やトゥルネン・ブルシェンシャフト、あるいは「無秩序な状態」は終息した。ドイツ連邦における「旧体制」の指導的政治家であるアウグスト・フォン・メッテルニヒ侯は、ブルシェンシャフト、学生の策動に対して断固たる行動を貫徹することができた。ベルリンではヤーン自身が逮捕され5年間投獄された。法的根拠はカールスバート決議であった。多数のトゥルナー、学生そしてアカデミカーたちが今や開始されたドイツ連邦における「扇動者迫害」の犠牲者となったのである。

トゥルナーの努力がプロイセンやオーストリアのように、ことさら批判的に見なされていなかったヴュルテンベルク王国ですら旧権力の共同に従った。マインツの調査委員会はヴュルテンベルク政府に対しても、トゥルネン場を閉鎖し、また陰で糸引く黒幕、とりわけカール・フェルカーを引き渡すことを要求したのである。このことはテュービンゲンにとってトゥルネン

場を閉鎖し、ブルシェンシャフトを禁止しなければならないことを意味していた。ヴュルテンベルク政府はテュービンゲンのトゥルネン教師、カール・フェルカーの陰謀やコツェブー暗殺への関与の決定的証拠が存在するまで、フェルカーの申告にしたがって彼の引渡しを長い期間拒否した。大学の事務局長であるフォン・アウテンリートはフェルカーを尋問することを依頼された。この点についてフェルカーは次のように思い返している。「決して政治的意図を隠そうとはしないが、しかし陰謀とザントの行為へのあらゆる関係はきっぱりと拒絶した私の回答がマインツへ送られた」と。調査委員会はさらに新ためてフェルカーの引渡しを要求し、今やヴュルテンベルク政府もまたテュービンゲン大学としてフェルカーを解任し、彼に国を去るよう勧告する以外の道は残されていなかった。もしそれがなされない場合、彼を引き渡さなくてはならなかったからである。

フェルカーは非追放者のように夜陰に乗じて国外へ去っていったのではなく、「にぎやかに」当地を後にした。加えてヴュルテンベルク王は、彼に50ドゥカーテンを旅費として渡し、また大学も彼に以下の証明書を発行した。すなわち、「アイゼナハ出身のハインリッヒ・カール・フェルカー氏に対しては次のことを証明するものである。彼はトゥルネン教師が欲しいという学生たちの要求によって1818年にテュービンゲン大学に招聘された。同所で文学部生として学籍登録され、大学当局の許可を得てトゥルネン施設を建設した。このことはテュービンゲンにおいて、後に政府の命令で閉鎖されるきっかけをフェルカー氏がもたらしたことを意味するものではない。彼はさらに大学生に対してトゥルネンの授業を行う間、自らの教育職に関す

る学問を広範に教育しようと試みた。彼の作法を鑑みれば、大学生に向かって平穏を維持し、また学生たちを耽溺から遠ざけるうえで非の打ちどころがなかった。彼はとりわけ、トゥルネンならびに地理学、歴史学そしてラテン語の細目において教授した男たちを非常に良好に、また身体運動の意図においても慎重に扱った。チュービンゲンでは、氏の振る舞いに対して何人たりとも苦言を唱えることはほとんどなかった。」

大学の学長と法律顧問の署名が付してあるこの証明書と国王から与えられた50ドュカーテンの饒別は、フェルカーにとってスイスでの新しい生活を維持していくのに役立った。ところで、チュービンゲンにおけるトゥルネンは、トゥルネン場が閉鎖された後も完全に消滅したわけではない。正式の再開は確かに禁止されたが、しかしその局面で再建されたチュービンゲンのブルシェン協会がフェルカーのトゥルネン場で定期的にトゥルネンすることを会員に義務づけたとき、誰一人として拒まなかった。ヴェルテンベルク国王の義兄弟で、チュービンゲン大学で学んだアレキサンダー侯自身、1821年にトゥルネン運動に参加したとされている。

カール・フェルカーは1821年以降、クールにおける州学校で指導を行った。彼は当地に著名で影響力のあるスイスの教育学者、ヨーハン・カスパー・フォン・オレリの推薦でやってきた。フェルカーは自らの実践を実によくこなしたので、生徒からの好感を得られたのみならず、オレリ自身もスイスの学校へのトゥルネンの導入を強く支持した⁸⁾。スイス、特にクールにおいて、彼はドイツの「デマゴーク」および彼の学生時代から知られていた亡命者、たとえばカール・フォレンとバーゼルの法学部教授、

ヴィルヘルム・スネル——彼の兄弟ルートヴィヒはロンドンで活動し、後にフェルカーを力の限り支援した——と再び並列的に扱われた。加えて、フェルカーはトリエント出身のイタリア人弁護士であるヨアヒム・プラティ博士と接点を持った。博士はガルダ湖の出であり、秘密結社「カボナリ」の会員という理由からイタリアからの逃亡を余儀なくされ、スイスで途中滞在し、そして英国へ渡ったのである。彼もまたフェルカーを支援した。クールという地は政治警察から逃走中であったドイツとイタリアからの学生と大学教授にとって貯水池のような場であった。「われわれ大学教授は逃亡者を友好的に受け入れた。そのことは至る所でスパイ活動をしているメッテルニヒの監視の目——彼はすでに長いこと「デマゴーク」のプラティ、スネル、フォレンそしてフェルカーの受け入れに関する疑念を連邦政府に報告していた——から逃れられなかった。そして彼は連邦委員会を通じて連邦政府に宛ててわれわれの追放のための最初の覚書を送付させた。」追放から逃れるために指名された者たちは英国へ逃れた。フェルカーは彼の回想録の中で次のように記している。「私は小さな委員会に呼び出された。委員会は私に対して、私が革命の宣伝に関わり持つのであれば、即座に私との関係を切ったものとみなすと通告した」と。カール・フェルカーもまた、友人のフォレンとプラティの後を追ひ、スイスからロンドンへ向かったのである。

4. そして英国で

フェルカーは、彼が教師として多くの成果を残し、また彼の言葉に従えば多くの友人のみならず熱狂した生徒を獲得し、心の底から幸福を

感じていたスイスからの退去を「追放身分」と捉えた。それに屈することなく、彼は1825年にロンドンに到着した後、異国の地でできる限り早く順応するためにあらゆることを行った。彼は集中的に英語を学び、またドイツ語の教師そしてトゥルネン教師、すなわち彼が後に多くのプライベートの学校で行った活動にも応募した。友人やスイスからの推薦書の助けを得て、彼はロンドンにおいて広い庭付きの家を買い、またその庭にトゥルネン場を設けた。この投資のためにフェルカーがどこから財源を調達したのか、彼の回想録からははっきりしない。彼は次のことを語っているだけである。すなわち、彼のスイスの友人から推薦されたベンサム卿という人物が保証を引き受けたと。レーゲントパークの近くにあるユニオン・プレイス1号の建物の中にあるこのトゥルネン場は、ロンドンにおける最初の「戸外の体操場」であり、それはドイツにおけるヤーンのトゥルネン場のモデルにしたがって建設され、ヤーンの弟子たちによって実践された。ベンサム卿はフェルカーを最初の生徒に紹介したが、週3日、男の子とともに「紳士」にもトゥルネンの授業を行った。少なくともロンドンでの天候が許す限り、戸外でトゥルネンがなされた。

とはいえ、これがロンドンにおけるフェルカーにとって唯一の活動あるいは収入源ではなかった。彼はロンドンとその周辺の様々な教育施設でも授業を行った。特にフェルカーが記しているように、「若い女性」の学校は重要であった。そこで彼は夫人に「女性の体操」を教えた。参加者はすべて大満足であった。

人びとの関心も高く、また仕事も非常に順調であったので、フェルカーは友人のスネルを説得してロンドンにおける2つ目のトゥルネン場

を経営することになった。「彼はできるだけ中心街にあり、ギムナジウム（トゥルネン場そして運動を古ギリシア語の様式にしたがってギムナスティック・エクササイズと名づけたように）の建設に適した場所を探すように要求した。」フェルカーが報告しているように、このトゥルネン場、「プリムローゼヒル・ギムナジウム」では、1827年と28年の夏、週2回「400人以上の若い男性たちが熱心に」運動を行った。フェルカーは最終的にヤーンとドイツにおけるトゥルネン場のモデルにしたがって、フォアトゥルネンシステムを構築し、そして第一線から退いてトゥルネン場の指導を「トゥルナーの委員会に委ねたかった⁹⁾。」

フェルカーはロンドンにおいて急速に言語と文化に適応し、そしてロンドンっ子も当初、「フェルカーのシステム」に注目した。しかし、彼らはいくぶん風変わりなドイツのヤーンの弟子を笑いものにした。この点はヴィクトリア時代の有名な風刺画家にして風刺作家で、ロンドンの日刊紙の中で風変わりなドイツ人の多くの風刺画を発表していた、ジョージ・クルックシャンクの風刺画から読み取ることができる¹⁰⁾。フェルカーは彼の生計を様々な学校での教師としての収入と彼が生徒に求めた報酬、少なくとも1ヶ月1ポンドによって賄うことも理解していた。その際、彼は様々なトゥルネン・体操のメニューを提供し、年配者（シニア・クラス）の朝と夕方の授業、その間、他の年齢のグループに対して授業を行い、子どもに対しては割引制を用いて、また個人レッスンは割高で行った。フェルカーのトゥルネンシステムとトゥルネン場のようなものを英国ではまだお目見えしておらず、ロンドンの人びとが最初、フェルカーと彼のトゥルネンの運動に魅せられたことも

理解できることであった。しかし、初期の多くの成果にもかかわらず、興味は衰えていった。すでに1830年にロンドンにおけるフェルカーのトゥルネン場は見捨てられたのである。

彼の失敗の理由は様々である。第1に、彼は称賛されただけではなく、2人の競争相手、すなわちイタリアの体操のエキスパートであるシグノア・ヴォアリノとシグノア・テダッチからトゥルネンシステムが攻撃された。第2に、ハインリッヒ・クリアスとの対立も生じていたらしい。クリアスはスイス軍においてグーツムーツに依拠して練り上げた体操体系を普及し、それは1822年に英国にも伝播した¹¹⁾。英国ではグーツムーツの体操のモデルは知られていた。というものの、彼の著書『青少年の体育』（1793年）が英語版で紹介され、また教師と将校によって興味深く読まれていたからである。ついでに言えば、それはスウェーデンの「体操家」P. H. リングの著作の英語訳と同様である。グーツムーツとリングを志向していたクリアスに関しては、英国では青少年と年配の兵士の健康の保持・増進、身体鍛錬のための体操と身体教育を重視した人物として知られていた。

ヤーンとイエナそしてテュービンゲンでの経験に忠実であったフェルカーの実践を、当初、若い英国人（そして若干の教育学者）は熱中した。なぜなら、それは未知のものであったからである。しかしこの熱狂は新しいものの魅力が消耗したとき、しばんでしまった。ヤーンのトゥルネンは英国では流行おくれになってしまった¹²⁾。国家の立場から「森林長官」によって支援されていたプリムローゼヒル・ギムナジウムを除いて、すべての他のフェルカーのトゥルネン場は消滅した。プリムローゼヒルでは、ヤーンのトゥルネンの「トゥルネン規則」の模範に

したがって、またフェルカーがそれをテュービンゲンでも適応させたように「規則」を設けた。規則は「キーパー」によって監督され、またトゥルネン場の秩序を保証することに貢献したのである。

プレスティジ（1988, 8頁）は、ロンドンにおけるフェルカーとヤーンのトゥルネン場のトゥルネンの敗北をもたらしたである根拠を次のように記している。

「もちろん、答えは以下のとおりである。フェルカーは2つの誤りを犯したのだ。彼の戸外の体操は典型的なロンドンの紳士が8ヶ月間、湿った季節やもうろうたる冬を生きながらえることを助けることができなかった。そして彼は「体操クラブ」の設立にも失敗した。彼の顧客たちは「帰属する」という感覚を持っていなかった。GGSクラブのメンバーが30年後にしたようなこと、すなわち社交を楽しみ、12月の暖かい体育館で満足するようなことを彼らはしえなかったのである。」

ジム・プレスティジが正しく喝破しているように、ロンドンにおけるフェルカーのトゥルネンは、後のドイツのトゥルネン協会にあって成功を収めたであろう2つの要素を欠いていた。一つは年間を通じてトゥルネンをすることができる安定的な室内トゥルネン施設である。そしてもう一つは、トゥルネン、共同の社交的な催し、そして祭典の場で共感を育み、深めていくことができるクラブと協会の会員の連帯感情である。このことは1860年代のドイツ人のトゥルネン協会、そして様々な「スポーツ」と他の事柄の育成を目的として設立された英国のクラブでは満たされていた。

フェルカー自身、なぜ英国人のトゥルネンへの熱中が初期の成果の後で失われたかについ

て、本質的な理由を次のように記述している。すなわち「ドイツとスイスにおいて重要な国民的事項となったトゥルネンの自由で愛国的な熱狂が、ここでは欠けており、また私はロンドンからの出発後、トゥルネンの普及についてもはやほとんど耳にしなかった。」加えて、英国社会の上流階層からはトゥルネンは軽蔑的に見下されていたようである。ジェントルマンはフェルカーが「一般の人びと」をトゥルネンの授業に参加させていたことを快く思っていなかったのである。それにもかかわらず、フェルカーはロンドンにおける短い滞在の間、後に彼と非常に友好的な関係築いたトゥルネンの仲間たちを見出した。とりわけ、彼が記しているように「急進自由主義的な冊子『エグザミナー』」に集った何人かの協力者たち」である¹³⁾。

ロンドンにおけるフェルカーのトゥルネンは、とりわけ、一方でドイツにおける特別な政治的、文化的関係のもとで発展したトゥルネンを英国に持ち込んだがゆえに失敗した。他方で、なぜドイツにおけるヤーンとマスマンに従ったトゥルネン体系が浸透できなかったのかについても、同様な理由から見通せなかった。つまり、学校体育モデルとしてもトゥルネンの体系は有効ではなかったのである。なぜならトゥルネン場での授業では共同の文化的な目的を築き上げる連帯感情が生まれなかったからである。ドイツでは、それはトゥルネン協会が担い、英国では19世紀中旬からスポーツクラブが育んだ。1861年にドイツ人の移住者によって設立され、また急速にロンドンに住むドイツ人の文化的な中心地のみならず、他の地域の多くの移住者にとっての出会いの場となったドイツ人トゥルネン協会は、したがってドイツのトゥルネン協会と英国のスポーツクラブという2つの機能



図3 ロンドンにおいて1865年に落成されたドイツ
トゥルネンホール記念メダル

出典：F. L. ヤーン連盟にあるオリジナル

を持っていたのである。英国のオリンピック歴史家が述べているように、それは英国におけるオリンピック運動の立ち上げと活性化にとって最も本質的な刺激ともなった。しかし、たとえば会長のエルネスト・ラフェンスタイン（彼はフランクフルトの著名なトゥルネン教師で山岳トゥルネン祭——1860年代と1870年代に大規模なトゥルネン・スポーツ祭典、とりわけ1866年に最初のオリンピア祭と大規模なドイツトゥルネン祭がクリスタル宮殿で実施された——の創始者でもあるアウグスト・ラフェンシュタインの息子）のようなロンドンのトゥルネン協会の代表者たちは、英国とロンドンにおけるヤーントゥルネンの最初の普及者たるフェルカーのことを、もはや覚えていなかったのである¹⁴⁾。

カール・フェルカーに対するトゥルネン・スポーツ史的な関心はロンドンにおける彼のトゥルネン場の衰退で終了する。彼が1828年と1829年以降、英国で何ををしたのか、なぜ彼が1839年にスイスへ引き返したのか、もはや文献から読み取ることはできない。ただしフェルカーの遺品、すなわち彼の自ら起草した回想録がそれについて、いくばくか説明をしている。ロンドンにおける若いジェントルマンのみならず、トゥルネン教師自身にも、フェルカーがトゥルネン場で示したドイツ体操の活況に関する永続性の

ある動機づけが明らかに欠けていた。彼が記しているように、フェルカーは「私が力、自由そして人道性を生徒の心の中に築きあげるべく啓発的に介入しうる勢力範囲」を望んでいたのであるが、ロンドンにおけるトゥルネン場で、彼はたとえヤーンのトゥルネンを理解していたとしても、上記の視点から影響力を行使することはできなかったのである。

1827年春、著名な（初期）社会主義者であるロバート・オーウエンがロンドンに来て、そして偶然にも彼の息子がフェルカーのもとでトゥルネン場においてトゥルネンを行った。そのことを通じてフェルカーもオーウエンと面識を持ち、そしてこの友情は彼の後の回想録にとって決定的なものとなった。オーウエンと彼の信奉者たちはアメリカ合衆国で「社会主義者のコロニー」を設立し、またこの目的のために彼らはアメリカへ渡ることを切望し、このような社会主義者の実験を敢行したい協力者を募集した。フェルカーは即座に応じて旅行は計画され、そしてリバプールで出発する手はずであった。リバプールにおいてフェルカー、とりわけ彼の夫人は疑念を抱いた。彼女はそうえ、フェルカーがペスタロッチの原則にしたがって働いたプライベートな学校の教師として職を得ること、また最終的に自分の学校を開設することができると考えた。彼はそれゆえ、すでに計画されていたアメリカ行きの旅行を見合わせ、そのかわりにリバプールにおいて教師としてとどまったのである。彼はすべての科目とトゥルネンを教えたのである。もっとも、フェルカーの回想録で、今やトゥルネンは限られた役割しか演じられておらず、彼の教育学的な野心はドイツのトゥルネンの父、ヤーンよりもスイスの手本であるペスタロッチに依拠していたと書かれて

いるのだが。

フェルカーはリバプールにおいて非常に効果的に授業を実施し、彼の収入と財産の状況は好転していったように思われる。それにもかかわらず、彼はスイスとの友好的で家族的な結びつきを維持し、また何度も休暇中に彼の古い郷里へ旅した。彼の夫人は1828年のスイス滞在後、当地に残り、それは最終的にフェルカーの気持ちを再びスイスで長期間滞在する方向へ導いたと思われる。彼は1829年に長く申請され待ち焦がれていたサンガレン市の市民権を得た。そのために100グルデンの費用を要したようである。1830年、彼は英国で得た資金から城の土地「ヘールブルク」（2000フローリン）を購入した。それは近いうちにリバプールにおける雇用契約を終わらせ、スイスへ帰る目的のためであった。1839年に最終的に英国を去り、スイスへスイス市民として帰還するようにさせたのは2つの理由がある。第1に、リバプールにある教育施設、「聖ドミンゴハウス」の家賃が値上がりしたこと、第2に、生徒が多く欠席するようになったことである。また、フェルカーにとって不都合となった英国における政治的状況、すなわち保守的陣営と自由主義陣営の分離も影響していた。

しかし、フェルカーは将来のために準備を怠らなかった。つまり、ヘールブルクにおいて広範な準備がなされていたので、彼はスイス到着後、すぐにペスタロッチの原則に従った新しい教育施設を再興することができた。リバプールを去るとき、誇らしげに記しているように、彼の生徒たちからダイヤモンド付の金の指輪をもらった。そして多くの者が彼に恩義を感じていたので、彼らはフェルカーとともにスイスの新たな学校へ通った。ヘールブルクの彼の学校

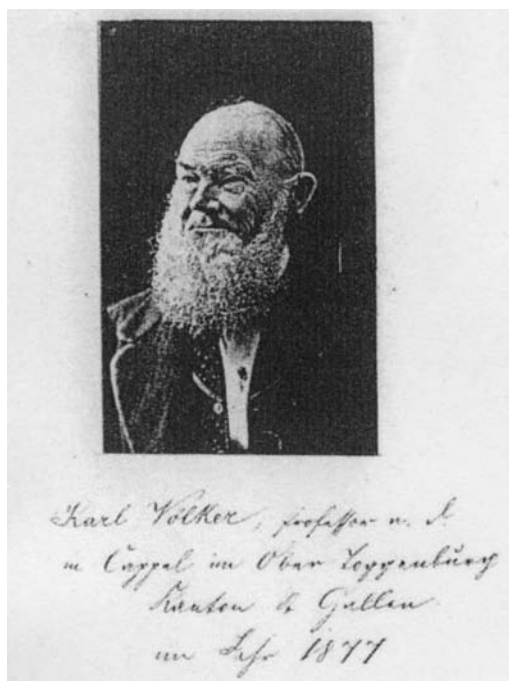


図4 カール・フェルカーの肖像

出典：UA Tübingen

は、回想録によれば効果的であったようである。フェルカーはサンガレンとスイスにおいて著名な人物となった。学校当局は彼に学校視察をするよう提案し、彼は地方政治にも参加し、農業における品種改良の導入を促進し、そして教育制度、とりわけ幼稚園教育の改革に力を尽くした。加えて、彼は教育問題に関する多くの論文と本を書き、講演を行った¹⁵⁾。

彼の長い波乱に満ちた人生の最後において、フェルカーは身体的に常に虚弱であった。彼はリュウマチで自らほとんど動けなかった。それにもかかわらず彼の生き様を見れば分かるように（たとえ書く手は震えていたとしても）、彼は精神的に最後まで活動的であった。回想録の最後で彼は、彼が特に感謝したい人物への謝辞を記している。その最初の所で彼は「教育の親友であるエデュアルト・デュレ。彼と私はイエ

ナで熱心にトゥルネンを行い、そしてマスマンと一緒にトゥルネンを普及しようと試みた」と記している。仮に彼がトゥルネンについてほとんど語らないにしても、彼の回想録の最後の表現は、フェルカーがトゥルナーそしてヤーンの信奉者としての初期の体験からいかに強く影響を受けていたのかを理解させるものである。いずれにせよ革命的な1848年のトゥルナーあるいは職業トゥルナーにおいては、ナショナリスト、ヤーンそしてヤーンによるトゥルネン運動の影響はなかったが、フェルカーが彼の人生を通じて重視していたものは、初期のヤーンのトゥルネン、ならびに積極的、闘争的なヤーンと彼の信奉者たちのナショナリズムが導いたロマン主義的な国民教育の理念であったといえるのである。

注

- 1) テュービンゲンにおけるフェルカーの社会活動とトゥルネン場建設に関しては、クリューガー等が編んだ文献（1989年，S.21f. ならびに1998年，S.15f.）で詳しく扱っている。これらの叙述の根拠となっているのは、テュービンゲン大学文書館（UAT 117/651; 678），ならびにたとえばヘルメス（1905年），オイラー（1881年，1894年）そしてガッシュ（1920年）のトゥルネン史の文献の中で使用されている史料である。ヴィルト（1964年）も彼について短い文章をよせている。加えて『ドイツブルシェンシャフト人物事典』におけるカウプの事典の記事（2000年，刊行）を参照。カール・フェルカーの遺品はサンガレンにおけるカントン文書館にある。同館はとりわけ、非刊行でこれまで利用されてこなかったカール・フェルカーの包括的な手書きの回想録が残されている。本稿の叙述も、この回想録に依拠している。
- 2) この手紙は UAT（117/651）にあり、また1995年に TSG テュービンゲン創設150周年の展示の際に披露された。

- 3) 後世に影響を与えた3名のトゥルネンの体系家たちは、すべてスイスで活動し、またペスタロッチの教育学と彼の『初等体操』から影響を受けている。Vgl. この点に関しては、イエーガーとシュピース（1996, 176ff., 219ff.）に関する私の研究ならびにバイアーの研究（1999）を参照。
- 4) ユーバーホルスト（1978）とホフマン（2001）の研究を参照。加えて本巻所収のヴァッソングの論文。
- 5) 英国におけるフェルカーの活動に関する史料・文献の基礎は僅かである。この叙述は全体的にフェルカーの手書きの回想録に依拠している。そこでは英国時代の事柄が僅かに扱われている。英国スポーツ史研究ではフェルカーはプレスティジ（1988）の例外を除いて、ほとんど言及されていない。1860年代以降のロンドンにおけるドイツのトゥルネン協会の活動に関しては関心がもたれている。そこでも30年以上前のフェルカーとの関係については指摘されていない。Vgl. ベルネット（1991）。
- 6) フェルカーは、イエナの初期ブルシェンシャフト（1815-1819）の会員の手書きリストには名を連ねていない。彼のメンバーシップは正式には1819年以降に証明される。しかし、彼は最初からイエナのブルシェンシャフトの中で、ある役割を演じていたことは明らかであろう。カウプ（2004）を参照。
- 7) 歴史家のハインリッヒ・フォン・トライチュケは、すでにフェルカーのザントとの親密な関係に言及している（『19世紀ドイツ史』第Ⅲ巻、432頁）。
- 8) ヴィルト（1946, S.59ff.）オレリの役割に関してはシュトルツペラー（1955, S.130ff.）参照。
- 9) この言明は自ら起草されたフェルカーの回想録による。それは一部プレスティジの情報によって発見されている（1988, pp. 8-16.）
- 10) これについてはプレスティジを参照。しかし残念ながら、現在までこの風刺画のオリジナルを確かめることはできていない。
- 11) このプレスティジの主張（1988, p. 8）については、ヴィルト（1964, S.60）そしてフェルカーの回想録からも読み取ることはできない。
- 12) プレスティジ（1988, p. 8）は同時代の新聞「ベル・ライフ」紙、1828年7月27日付けの記事から引用している。
- 13) 彼の回想録の多くの箇所から、フェルカーにとっては彼の生徒たちに認められ、慕われることがいかに重要であったのかは明らかである。たとえば、いかに英国出身のかつての多くの教え子が後に彼とスイスへ同行し、彼を訪問しているいは彼と文通をしていたかを彼は強調している。
- 14) ロンドンにおけるドイツのトゥルネン協会の歴史は、比較的よく探究されている。1865年サンバンククラス駅付近に作られた美しいトゥルネンホール同様。英国オリンピック協会サイドからのトゥルネンホール保管にむけたあらゆる努力にもかかわらず、建物を維持していくことはできず、2001年にトゥルネンホールは取り壊された。ロンドンのトゥルネン協会に関してはベルネット（1991）参照。
- 15) 回想録によれば、たとえば『進歩への道』『民衆学校』の2つの文献。彼の出版物と文献の選択はカップ（2004）にある。

史料

Kantonbibliothek (Vadiana) Sankt Gallen, Nachlass

Karl Völker

Universitätsarchiv Tübingen

文献

Beyer, E., Alfred Maul und die Großherzogliche Badische Turnlehrerbildungsanstalt in Karlsruhe. In: Krüger, M. (Hrsg.), "Eine ausreichende Zahl turnkundiger Lehrer ist das wichtigste Erforderis ..." Zur Geschichte des Schulsports in Baden und Württemberg. Schorndorf 1999, 66-78.

Bernett, H., Vom Schwarz-Rot-Gold zum Schwarz-Weiß-Rot. Die Geschichte des Deutschen Turnverein in London 1861-1916. In: Luh, A./ Beckers (Hrsg.), Umbruch und Kontinuität im

- Sport. Festschrift für Horst Ueberhorst. Bochum 1991, 298-309.
- Euler, C., Geschichte des Turnunterrichts. Gother 1881 (2. Aufl. 1907).
- Euler, C. (Hrsg.), Enzyklopädisches Handbuch des gesamten Turnwesens und verwandter Gebiete, 3. Bände. Wien/ Leipzig 1894-1896.
- Gasch, R. (Hrsg.), Handbuch des gesamten Turnwesens. Wien/ Leipzig 1920.
- Hermes, H., Geschichte des Turnens und der Turngemeinde Tübingen. Tübingen 1905.
- Hofmann, A., Aufstieg und Niedergang des deutschen Turnens in den USA. Schorndorf 2001.
- Kaupp, P., Karl Völker. In: Dvorak, H. (Hrsg.), Biographisches Lexikon der Deutschen Burschenschaft. Teilband 1: Politiker. Heidelberg 2004 (im Druck) (Universitätsverlag Winter).
- Krüger, M. u. a., 150 Jahre Gymnastik, Turnen, Spiel und Sport an der Universität Tübingen (1839-1989). Schorndorf 1989.
- Krüger, M., Körperkultur und Nationsbildung. Die Geschichte des Turnens im Reichsgründungs-jahrzehnt. Schorndorf 1996.
- Krüger, M., Klimmzügen, Aufschwüngen und Riesenwellen. 150 Jahre Gymnastik, Turnen, Spiel und Sport in Württemberg. Tübingen 1998.
- Prestidge, J., The History of British Gymnastics. Berkshire (BAGA) 1988.
- Strupeler, E., Die Anfänge der modernen Leibesübungen in der Schweiz bis 1833. Winterthur 1955.
- Treitschke, H. von, Deutsche Geschichte im 19. Jahrhundert. Band III, Berlin 1934.
- Ueberhorst, H., Turner unterm Sternenbanner. München 1978.
- Wildt, C., Auswanderer und Emigranten in der Geschichte der Leibesübungen. Schorndorf 1964.